

准看護師から師長（管理者）に
「看護師になることで可能になる
“看護”がある」



（プロフィール）

平井美智子 氏

所 属 入間川病院 師長

勤 続 ケアワーカー1年・准看護師3年
看護師17年

卒業校 入間看護専門学校

* 准看護学校卒業直後に進学

いつも誰かに後押しされて今日がある、と陽光のような笑顔で語る平井美智子氏。外科病棟の師長として活躍されているしながら、落ちこぼれだったと自認されている平井さんのこれまでの道のりを伺います。

—看護師を目指したのはいつからですか

高校生の時です。自宅で父が闘病していて、近所の看護師さんが手伝いにきてくれていました。その姿をみたのがきっかけでした。でも、准看護学校の受験も落ちてしまって。働く必要があったから、ケアワーカーとして働き始めました。介護士の資格を取ろうかと思っていたら、職場の先輩たちに「看護の学校に入るためにここにきたんだから、一度は学校にいきなさい。それでも介護がよかったら戻っておいで」と叱られました。親身になって言ってくくださる気持ちが嬉しかったから、働きながら勉強して准看護学校に入りまし

た。奨学金制度があった狭山准看護学校を選びました。

—看護の世界への第一歩を踏み出しました

学校に入学しましたが、私は勉強が得意でもなければ好きでもなかったんです。ところが、職場の看護師さんたちからは「絶対に看護師資格を取ったほうがいい」と勧められ、准看護師の先輩からは「若いうちに行きなさい。大変でも今のほうが学校に行きやすいよ」と諭されました。准看護学校を卒業して、勉強を一回お休みしてしまうとこのまま二度と勉強する生活には戻らないという気がしたので、間を開けずに高等看護専門学校に進学しました。

—准看護学校と高等看護専門学校で学ぶ内容はどう違うように感じましたか

准看護学校から続けて勉強していたので、大きな差はありませんでした。とはいえ、看護師になるための勉強は、看護展開に根拠が必要となるので踏み込んだ内容だと感じました。

—国家試験はどのように対策されましたか

同じ職場と一緒に受験する同僚がいて、励まされていました。私は赤点ばかり取ってぼーっとしていたから、周りの友人たちが声をかけてくれました。勉強方法は、いろいろ考えて計画するというよりも、問題集を解くことを繰り返していました。本を読むだけでは覚えられないタイプでした。

職場では、国家試験の前5日間はお休みをいただき、それ以外は通常通りの勤務でした。家だと集中できないので、学校の図書館なんかも利用して勉強しました。11月までは実習もあって厳しいスケジュールでしたから、それが終わってから必死に。試験の日は決まっていて、逃げられなかったから頑張るしかなかった感じです。

—国家試験に合格し、さらには師長に昇格されています

師長になるなんて、まるで考えていませんでした。35歳の時、副主任を4か月務めて、そのあと師長の推薦を受けました。今年で6年です。

師長になったと同時に外科に異動になりました。先輩方もいる中で、外科のことを知らない自分が上に立たなくてはならない緊張がありました。さらに、患者さんとお話するのは平気なのに、スタッフルームで発言することが怖くなったことを記憶しています。一スタッフとしてではない、管理者として振舞うことの重さに潰されそうで毎日泣いていました。

—管理者としてのやりがいを教えてください

娘さんの結婚式への列席を望むターミナル病棟に入院していた患者さんに対応したことがあります。この時は、どうしたら良いか迷って部長に相談しました。「あなたの病棟なのだから、あなたが責任をとれる範囲で好きにしてください」という言葉に背中を押してもらい、思い切って娘さんにウエディングドレスを着ていただき、病室で小さなお式をしました。患者さんにもご家族にも喜んでいただけましたし、スタッフも嬉しそうで、本当に良かったと思いました。

師長を務めることで、患者さんに直接関わることは少なくなりますが、つながることはできるし、師長だからこそ家族に寄り添うチャンスがあるのだと考えが変わるきっかけであり、管理者としてのやりがいを感じた出来事でした。

以後、自分が目指す看護を実践する機会は師長という管理者の立場になってこそ多くあるのではないかと考えています。とはいえ、今でも看護部長には叱られますし、いっぱいいっばいで、逃げ出したい気持ちもあるんです。間違った方向に行かないようにという気持ちを持ち続けています。

—進学を目指す皆さんにメッセージをお願いします

進学することは、准看護師の時は意識していなかったことを学ぶチャンスです。

勉強することで、患者さんのケアに広がりを持つことができます。ただ資格を取るための進学というよりも、看護についてのいろんな発見ができる機会だと考えると良いのではないのでしょうか。

いま学校で学んでいる人には、辛いこともあるけれどこれから可能性が広がることを、資格を取っても何も見えないことを心配する人には、待遇が向上することを、やりたい看護があるけれど責任が重くなるのではと気後れする人には、まずはやりたいことを実現するために資格を取ろうと伝え続けていきたいです。

(聞き手：看護を考える委員会 委員長 石川治美)



看護部長（左）と一緒に。職場の様子が伝わってくる

メッセージ

副主任から、その熱意を見込まれて師長として7年目を迎えます。多忙な外科病棟の管理の他に、感染対策を兼務しており、昨年からの新型コロナウイルス対策には不眠不休で対応しております。頼れる師長さん！これからも宜しくお願いします！

入間川病院 看護部長 細谷美穂氏